

第7回

# 働くことと休むこと

(本編第19章より)

人は労働時間も通勤時間もなるべく減らした方がよい。たとえ、そのせいで高い家具が買えなくなり、大きい家に住めなくなっても。

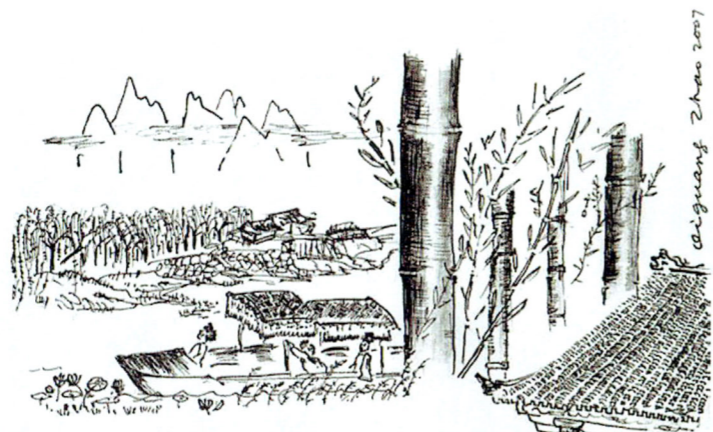
多くの人は自分のことだけでなく他人のことまで気にしてしまう。仕事を成功させただけでは満足せず、なんとか同期に勝つてやろうとしている。このような競争意識は大自然の中にも存在している。木のてっぺんにいるサルはより多くのパートナーとバナナを手にする。下の方の枝に

いるサルもパートナーとバナナを有しているが、てっぺんのサルは自分より多く持っていると考え心休まることがない。人間もまたなるべく高い位置に上りたいと毎日残業をかさねる。自分と仲間の休憩時間を犠牲にして這い上がるようにする。自分自身を犠牲にしているだけではなく、格差による悩みを同じように抱える人々たちをも傷つける。同僚も自由な時間を捨てて付いて行くしかなくなる。もし他人が少しでも仕事を減らしてくれたら自分もこんなにならばいい。いのにと多くの人は感じているが、一方的に思うだけでは実現しない。それどころか、もしがんなばって働かなければ他のがんなばっている人への地位を奪われてしまうと考え、落後者になることを恐れる。

人は労働時間も通勤時間もなるべく減らした方がよい。たとえ、そのせいで高い家具が買えな



太陽を追う夸父



のんびりと自然の法則に従おう

くなり、大きい家に住めなくなっても。現代人は中国の古代神話に出てくる夸父(クワフ)のようになってしまう。大男の夸父はあるとき太陽を追いかけると決め、弓から放たれた矢のように駆け出した。しかし、あまりの暑さとのどの渴きに足を止めた。この時、前方に水を勢いよくほとばしらせて流れる黄河が見えた。そこでまっしぐらに黄河に向かうとその水をすっかり飲みほしてしまった。その後、夸父は渭河の水も飲みほしたが、暑さと渴きはおさまらず、さらに北の湖沼へ向かった。しかし残念なことにその途中で力尽き、死んでしまった。この物語は中国で、「夸父日を追う」ということわざになっている。すなわち、自分の能力をわきまえない人のことを言うが、これはギリシャ神話のイカロスと同じだ。イ

カロスは蠟(ろう)で作った翼をつけて太陽に向かったが、太陽に近づくとその熱で蠟が溶け、水に落ちて死んでしまった。

今も、世の中にはたくさん夸父とイカロスがいて、それぞれの太陽、すなわち成功を追いかけている。しかし現代人は夸父やイカロスよりもっと悲惨だ。たった一人で太陽を追いかけた夸父は自由に休んだり水を飲んだりできたが、現代人の場合は自分が追いかけるだけでなく、他人からも追いかけてられているからだ。夸父はひたすら太陽を追いかけただけだったが、現代人は自分にとっての太陽を追いかけただけでなく、ライバルに追いつかれないか後ろも気にしなければならぬ。のどが渴(い)くが暑(あ)さがあつたが、頭上の太陽はどんどん先に進むし、後ろからはライバルが間近に迫って来るからだ。多くの人は「何年働いていくら稼いだら引退する」と言う。一部の幸運な人たちは本当にその目標を達成し、つらい労働と引き換えに手に入れたのんびりした生活を楽しむことができる。しかし残念ながら、多くの人はそのご褒美を楽しむ前にこの世を去るか病気に倒れてしまう。ある人は定年前に早世し、またある人は何年働いてもたいした貯蓄が残せない。太陽はあるのにそれを追いかける人はいなくなってしまう。

仕事なんかやめて気楽に生きろと言っているのではない。むしろ仕事は長期的な楽しみをあたえてくれる。仕事を通して洞察力や創造性、やる気を高めることができる。人にとつての最高の喜びとは仕事をやり遂げた時の喜びだ。読書、音楽鑑賞、庭園の散歩、これらももちろん楽しいが、幸運な人は仕事に没頭することで満足感を得る

ことができる。まさに、W・H・オーデンの言う「仕事の中で我を忘れる」である。オーデンの詩によればそれは外科医があざやかな一刀目を下ろした瞬間であり、事務員が一枚の船荷証券を書き上げた瞬間だ。仕事に没頭しているこのような境地は、無不為の中で無為を実現していると言える。

仕事に没頭している時、人はそのことに集中し、個人的な問題に悩む時間はなくなる。仕事とは結果ではなくプロセスであり、受動的なものではなく主体的なものであり、対決ではなく協調である。太陽を追いかければ限りなく苦しみがあふるだけだが、ゆっくり昇る太陽の下ジョギングすれば、悩みはなくなり軽やかですがすがしい気分になれる。



「パンを手に入れることはもとより大事だが、その美味しさを楽しむことはもっと大事だ」  
比較文化学者であるチーグアン・ジャオ氏が、身近な例から老子の人生哲学をわかりやすく解説した一冊。「よりよい老後」のために心身ともに無理を重ねる現代人に向け、肩の力を抜いて自然に生きることを勧める。  
2016年4月、日本経済新聞



チーグアン・ジャオ 北京出身。カールトン・カレッジ教授、同済大学特別招聘教授、清華大学客員研究員などを歴任。中国社会科学院大学院で英米文学修士号、マサチューセッツ大学で比較文学博士号取得。著作に「A Study of Dragon, East and West」、「Do Nothing & Do Everything」、「古道新理」、「老子的智慧」、「世路心程」、「客舟聽雨」、「コンラッド小説選」など。2015年3月、マイアミでの遊泳中の事故により永眠。ミネソタ州の「スター・トリビューン」紙で「北極オーロラの星」と評された。

町田晶 日中翻訳学院修了。東北大学文学部東洋日本美術史専攻、東北大学大学院文学研究科中国哲学専攻。学生時代の一人旅で中国文化の奥深さと中国人の温かさに触れたことから本格的に中国語を学ぶ。翻訳得意分野は思想、哲学、文学、食文化等。